



# 琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	冠船芸能における装束と結髪および髪飾り( Abstract_論文要旨 )
Author(s)	古波蔵, ひろみ
Citation	
Issue Date	2017-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/36686">http://hdl.handle.net/20.500.12000/36686</a>
Rights	

様式第7号

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目

冠船芸能における装束と結髪および髪飾りの研究

琉球大学大学院  
人文社会科学研究科

比較地域文化専攻

学生番号

氏 名 古波蔵 ひろみ

学位論文要旨（横書き楷書、ワープロ可、字数800字程度）

本研究は冠船芸能に焦点を当て、芸能を表現するのに不可欠な装束と結髪が、近世から現代にかけて、どのような変遷を遂げてきたのかを分析し考察を進めてきた。

特に冠船芸能にヒントを与えたとされる能楽や歌舞伎では、演者と装束間の一体化を図る手法として用いられてきた装束の「キマリ」が存在するが、これらの大和芸能の影響がどのように反映されたのかを分析した。さらに琉球の装束に対する独自性を知る上で、明らかにされなかった装束の工夫などもわかってきた。

冠船芸能を分析するための、絵図資料「琉球人舞楽御巻物」「琉球人坐楽并躍之図」（1832年）を使用し、文献史料は「冠船躍方日記」（1838年）と『校註琉球戯曲集』（1929年）を用いた。近代においては片山春帆の「琉球古典芸能大会」（1936年）の『民俗芸能記録画帳』に加え、古写真や証言を加えた。

冠船芸能においては、幻の装束となってしまった若衆衣装の「板締縮緬」や組踊に着用される女形衣装の「琉球薄衣装」の手掛かりを得るために、東京国立能楽堂の能衣装の調査および板締めの復元研究者からの聞き取り調査で情報収集ができたことは、本研究の重要な成果となった。

さらに、琉球の結髪については、これまで十分な研究がされておらず琉球独自のものと思われてきたが、研究する中で大和との密接な関係も見えてきた。

今回、このように能装束と冠船芸能の装束を比較することで、近世から現代までの装束や結髪がどのように変容してきたか考察することが、できた。